

「山讚賦」由来

増山清太郎

一、作詞由来と題名の読み方

私達の「針葉樹」は、創刊前の或る時期には「やま」という誌名にする予定であった。その後何等かの事情によつて「東京商科大学一橋山岳部年報」と改められて、一九二五年末か翌年初めかに、一号が発刊され、一九二六年一月一五日発行の二号から「針葉樹」と名乗るようになったのである。

「山讚賦」は前記の年報に載っているが、作者松崎武雄氏は山岳部から、「やま」に掲載するものとして寄稿を求められ、そのつもりで作詩したものである。従つて少なくとも作詩者は、標題を「やまさんぶ」と読ませるつもりだったろうと推察する。当然のこととはいえ、文中に山という字が異常に多いことも参考にすべきであらう。

吉沢一郎氏は「古くから『さんさんぶ』と呼んでいた、と言われる。私の説は作詩者の意志を推察したものであり、吉沢氏の説は、受入れた山岳部の現実を言われたものであつて、両者に矛盾はない。今後何と読むべきかは、今後の問題に属する。

この歌詞は、その後数回印刷されたが、何時も印刷ミスが多いので、年報に発表されたものを、そのままここに再録する。

詩作 松崎武雄
作曲 松崎武雄

山 讚 賦

山 讚 賦

あ あ 山 は 吾 が 行 く 殿 堂
あ あ 山 は わ が 棲 む 宮 廷
煩 悩 も 邪 悪 も 忘 れ
法 悦 と 歡 喜 に み ら れ て
山 籟 を 遠 く き く と き
う つ つ な く、
あ ま ひ す る か な

山讚賦 松崎武雄

紫の雲、ゆらめけば
白銀を射るや金箭
おこそかに山鳴りわたり
靈香の四方に薫じて
山々はいま、明けんとす
君見ずや、東の空
大聖の世を呼ぶごとく
山神は炬火をかざして
ものみなの生命のうへに
悠久の光と熱を
おしゆなり、いざ市去りて
崇巖の山におろがめ。

岩桔梗、黒百合咲ける
花園をつつむ山霧
はいまつの蔭より蔭を
おほろかに遊ぶ雷鳥
若人は六根清浄、
唱えつつ双手ふるなり。

あまひするかな

二、作曲由来と譜面

一九三〇年頃のこと、針葉樹会員A氏が、全く私的に、妹さんのピアノの先生石川強氏に「山讃賦」を示して作曲を依頼した。三一年春頃には完成したので、A氏は山岳部員B氏に託して、「歌ってみよう」勧めた。B氏は、「どういふ事情によるのか、この事を誰にも話さず、譜面は書齋に暖めていたので、毎日部室に出勤する私でさえ、このような作業が行われていることを知らなかった。

A氏の督促によって、譜面が私達の前に姿を見せたのは、三一年一〇月であった。見ると面白そうな曲なので、作曲者を訪ねて指導を求めた。A・B両氏は同道しなかった。作曲者は、温厚な青年で、その時の話の大意は、

一、私はピアノリストであつて歌手でない。従つてこの作品も、主旋律よりも、伴奏の方を評価していただきたい。

二、この作品は、何かに発表しようと考えていたところ、よく似た曲が他から現れてしまったので、発表は差し控えた。諸君がこの両曲を見られたとき、双方とも独創にあるものと解して欲しい。

三、原詩は、文字で読まれることを主目的として作られて、声に出して歌うことは、あまり考えていないように見受けられる。従つて作曲に当たっては、作詩者と打ち合わ

せを行い、多少の字句の修正を求めたかつたが、今回はその便宜が与えられなかった。従つて漢語は作曲に都合のよいように読んでもよい。

四、歌唱上の注意としては、まず「おごそかにやまなりわたり」のかからには半音下けるのである。一度下ると、あとが読みにくくなり、後半でアツくる。つきに「ききこえずやてや、ささゆき」とニッア、アツくる、確な歌おな、これはいはな。

と言つて、ここにかかると、右腕を頭上高く振り上げて、私達のタミ声を引き上げた。

一九三一年十二月九日の針葉樹会(多数の現役部員出席)で披露したところ、大変によい歌だから「部歌」としてはどうか、という動議が出た。A氏からは「これは全く私的なもので、部歌となることは全く考えていなかった」という、極めて謙虚な発言があつたが、結局満場一致で、部歌にすることに定められた。

部歌が出来た以上、譜面を印刷しなければならぬ。原譜はゴク細のペンで、優雅に書かれている上に、私達の面前で多少の修正が加えられたこともあつて、そのままでは印刷原稿にはなり得ないものであつた。そこで部員C氏の妹さんに頼んで浄写して貰つたところ、どうも出来がよくない。果たして正確に写されているのか、私は疑問に思つて、作曲者の校訂を求める

よう主張したのだが、この意見は採用されず、そのまま凸版におこされた。これが現在でも数少ない会員が所蔵されている処の「山讃賦」譜面である。

三、どのようにして歌われるようになったか
原譜を武蔵野音楽学校某教授に示したところ、伴奏の音が大きくなるので、声量の豊かな歌手になると、歌いこなせないのではないか。男子学生には、むずかしすぎないか」という批評を得た。

たしかに、当時の私達にとつては、むずかしい歌であつたので、残念ながらはじめはあまり歌われなかった。

針葉樹六号(一九三二年八月一日発行)に詳細な経緯を報告せず、部報欄二行半の記事に止めたのは、今にして顧みれば、編集責任者たる私の大失態だったが、その裏には、実際に歌われてない、という事実があつたのである。

部員諸君の口から、この歌をよく聞くようになったのは、私の感覚では一九五五年か六〇年頃のように思う。ところが、望月達夫氏は、「一九三二年にはじめて部屋の書架に山讃賦の譜面を発見し、普及に努めた結果、会合や合宿でよく歌つた」と言われる。望月氏が部歌を自ら唱い、部員に唱わせるよう努力されたことには、いささかの疑いも、私は持たない。問題は多く

の部員がどう受入れたか、中だるみはなかったか、若干の考証の余地を残すように思う。

四、「一橋応援歌集」について

戦後になって、一橋にも応援部が出来て、「一橋応援歌集」が発行された。みると「山讃賦」は歌詞のみで、譜が載っていないので、事由を訊したところ、

「編集にあたって、山岳部からは充分の協力が得られなかった。よって、詩については原作者に直接取材した。曲については、部員諸君に歌ってもらったのだが、ダラダラと浪花節みたいに語るので、採譜不能であった」という返事であった。よって、前述の出来のよくない譜面を渡しておいたところ、第二集には主旋律のみが載せられた。

五、おわりに

山讃賦は、上述のように、世間一般の部歌、会歌の類とは、異った手順で作られた。加えて、作詩後数年経って作曲された、という事情もあって、歌ってみて、何かゴコチないものを感じる。

作詩者は数年前まで、作曲者は少なくとも十数年前まで健在であった。私達も加わって、一度練習しを行うとよかったのだが、私の怠慢か

らその機を失ってしまった。

石原脩氏は「実際にピアノを叩いてみることに必要だ」と言われる。正にその通りであって、制作後六十余年を経た作品を、現代若人の感覚で見直すことは、原作者に対して必ずしも非礼に当たらないと、私は考える。大切なことは「山讃賦」は私達自身のものだという認識を持つことである。

冒頭に述べた東京商科大学一橋山岳部年報一

環境問題について考えたこと（リゾート開発の現場から）

東京は向島生まれの江戸っ子が、何の因果か岡山県の観光名所倉敷市に住み着いて早や十年が経過しますが、在京のOB諸先輩には御無沙汰を重ね、大変失礼をしております。たまの上

京出張時には年代の近い方々と旧交を温めなおす（？）機会を設けていただいたりもしますが、最近の学生山岳部問題などは、自分も現役時代に連続遭難事故を引き起こしてOB会のご指導を仰いだ一人として、何か協力・支援ができるのではないかと遠方から長い間問々としておりました。（結果、案の定、何もできませんでしたが……）

号には、藤原敏氏作詩「一橋山岳部に寄する」という唄が載っている。これまたA氏の斡旋によって石川強氏が作曲した。これは作曲者が「オドけた調子に書いた」と言われるもので、全体が踊るような民謡調で進む中に、東京音頭の一小節が顔を出すのであった。が、部員の共感を得られず、埋没してしまった。私の手許に譜面もない。

佐藤 周一

そんな役立たずの一地方会員ですが、近況報告がてら最近の話題である標題につき、自身の仕事を通じて感じたことを2、3書き留めてみたいと思います。

小生は現在、岡山県の東南端に位置する備前市（面積一三四km²、近くの小豆島よりやや小さい、人口三万一千人）にて、地域活性化のためのリゾート開発を推進する第三セクターに勤務しながら、当面の課題であるゴルフ場の開発作業に従事して二年弱になるところです。

事業の進行状況は、当初は大株主である市の主要な立場を得て、事前協議も用地買収までは